

# くらがの

発行所 倉賀野神社  
〒370-1201  
群馬県高崎市倉賀野町1263番地  
電話 027-346-2158  
FAX 027-346-2184  
例祭（秋季大祭）10月19日  
春季大祭 4月19日  
公式ホームページ www.chinju.info/



境内「飯塚久敏と良寛の碑」

飯塚久敏は倉賀野宿の出身、幕末期の国学者・歌人。天保14年（1843）の著『橘物語』はのちに数ある良寛伝の嚆矢とされる。歌集『かきつのはな』や、『諏訪旧跡志』等の多くの著作がある。嘉永6年（1853）に本神社建替の造営寄附帳序文を起草しており、格別にゆかりの文人である。

いま上野三碑の一つ、「多胡碑」の銘文の「羊」が人名なのか否かなど改めて話題となっているが、久敏は『上野國古碑考』で諸説を紹介しつつ持論を展開していて、興味深い。

（参考）①『飯塚久敏と良寛』高木明著 平成7年3月あさを社刊 ②『上野國古碑考』高崎市立図書館俳山亭文庫蔵



倉賀野神社



例大祭の日



## 「神饌」あれこれ

神道では神さまにお供えするお米やお魚などの食物を、「神饌」といいます。

稲作は遠い昔に高天原の神様から授けられた営みと云いますから、おさご（＝お米）や、米から作ったお酒、お餅などはもともと大切な神饌とされます。

神職が毎朝神さまに御挨拶し、神饌をお供えするお勤めのことを「日供」と呼びます。そして、毎月一日の早朝の「月次祭」にはお供え物も特別に用意されます。例えば春は、新じゃが、筍や蒨、そして苺や枇杷。夏はきゅうり、茄にゴーヤ、西瓜や桃。秋はカボチャ、栗、梨や葡萄・・・（想像するのも楽しいです！）ありとあらゆる食物は神さまの恵みのお蔭と感謝し、神饌としてお供えするのです。畑で採れた初物を、と神社に届ける氏子さんもいます。

そして例大祭などの特別なお祭りには鯛やお餅もお供えします。味甚粉（米粉）のお菓子が、撤饌（神饌のお下がり）として氏子町内に配られます。「おみこく」と呼んでいます。ハレの日の神事の後に、お神酒やおみこくを一同でいただくことを「直会」と云い、神さまにお供えしたものを食することで、元気をいただくのです。

どうぞご家庭の神棚にも、折々に神饌をお供えし、ご家族そろって直会をいたしましょう。

（宮司高木直明記）

## ■短信

### ◎茨城県の婦人神職一行が参拝に

五月、茨城県神社庁婦人部の一行が参拝した。代表の水戸市開江町吉田神社林さんと宮司をはじめ九名の神職の皆様が近県神社視察旅行として来社、相互に研修と親睦を深めた。



### ◎「くにたまの会」総会開かれる

七月、「くにたまの会」の第五回総会が奈良県の大神神社で開催され、本社から高木宮司が参加した。「くにたまの会」は、大國主大神をおまつりする神社の全国組織で、総裁は出雲大社の千家尊祐宮司。本神社の御祭神大國魂大神は大國主大神の荒魂であるといえられている。総会では岡田荘司國學院大學教授の「古代国家と祭祀——大和と出雲——」と題した講演が行われた。

### ◎参集殿で「心に響く音楽会」

九月、NPO法人倉賀野まじづくりネットワーク（吉野矩久代表）の主催により「群馬交響楽団 心に響く音楽会」が開催された。地域のお年寄りから子供までおよそ百四十人が境内の参集殿に集まり、「となりのトトロ」などの馴染みの曲や、ドヴォルジャークの弦楽五重奏曲などを堪能した。群響の五人の演奏者のなかに、倉賀野町在住、氏子の栗田さんご夫妻がいちばん嬉しかったこと。会の最後に「ふるさと」を一同で合唱し、文字通り心に響く音楽会となった。



### ◎高崎市「神楽の集い」に出演

九月、第四回「神楽の集い」が榛名文化会館で開かれ、市内の神楽8団体が集合した。高崎市神楽保存会連絡協

議会が中心となって、三年に一度開催されるもの。

倉賀野神社附属太々神楽保存会（今井徳男会長）も参加して、「稲荷種蒔之舞」を披露し喝采を浴びていた。出演した団体が相互に交流し、伝統文化継承の大切さを確かめあった。

### ◎毎月一日に「月次祭」を斎行

「月次祭」は、氏子の各家庭の平安とともに、国の安泰と皇室の弥栄を祈る儀式です。どなたもご昇殿いただけます。

朝六時三十分には開式して七時前には散会となります。どうぞ倉賀野神社にお参りして、新しい月をすがすがしくお迎えになりますようご祈念いたします。（但し一月一日は初詣・歳旦祭のため月次祭は行われません。）

### 「倉賀野神社奉賛会」に加入して

ご神徳を厚く戴きましよう。  
社務所 ☎ 〇二七（三四六）二二五八

## 人生の節目のお祭り

- 初宮詣（お宮参り） 子供は神さまからの授かりもの。健やかな成長を祈り、初めて神社にお参りします。
- 七五三詣 三歳は男女とも「髪置」、五歳は男子の「袴着」、七歳は女子の「帯解」の祝いとして、十一月十五日の前後にお参りします。
- 入学・卒業の奉告 試験に向うには、神前に誓いを立て、心を静めるとよいでしょう。入学や卒業にあたっては神様に感謝のお参りをします。
- 厄除 人生は山あり谷あり。とくに男性の数え四十二歳、女性の数え三十三歳は大厄とされます。
- 成人式 昔は「元服」といわれました。大人の仲間入りできたことを神様に感謝し、御加護を祈ります。
- 結婚式 伊邪那岐命、伊邪那美命の男女二神の夫婦の道に倣った厳粛な人生の門出です。幸せな結婚生活を築くことを神前に誓います。（詳しくは社務所にお尋ねください）

### 随想 旅の土産

総代会長 高橋義明

広重、英泉の浮世絵にある中山道を旅することに決めた。絵の歴史や芸術美をなぞるといった大袈裟なものではない。

江戸日本橋と京三条大橋を結ぶ、街道の江戸時代の道に沿った六十九次を気ままに訪ねる旅である。時代が移り、昔の面影は見るすべもないが、迷ったり、遠回りをしながらも自然の中に、人々の暮らしの中に、古びた社寺に、昔の人の考えや足跡が刻まれているのを探すという生意気な思いがある。

歩く勇氣も体力もない。老人、男三人の車旅である。全行程、何年もかかるだろう。

故あって京は最後まで残してある。

近江八景は広重の浮世絵にある所に立ち寄り、それぞれが思いを巡らすことにした。

比良暮雪、矢橋帰帆、堅田落雁

粟津晴嵐、唐崎夜雨、瀬田夕照

三井晚鐘、石山秋月

お手本が実景より上等であることに多くの旅人が、感動し、困惑したに違いない。

日吉大社、建部大社、小野神社、多賀大社参拝する。

尊ぶ心を持ちながら、今度の旅でも何故か三井寺、石山寺の二つの寺院礼拝出来なかった。

大津宿から草津宿、守山宿、武佐宿、愛知川宿、高宮宿、鳥居本宿、番場宿、醒井宿、柏原宿、今須宿、関ヶ原と二日間これだけの宿場を走った。

迷って地図を食み出して仕舞ったこともあった。道に沿った町並みが寂れている。帯のように長く、厚く重なった年月と歴史を持つ中山道が車の走る道ではないことは承知しているつもりでいたが、不便なのだ。

駐車場がない、案内標識が少ない、・・・広がった道と新しい道になった町、どこも同じような顔になっている。

町を歩いてみた。

すぐに間違いに気が付いた。考えが窮屈になっていた。町に住む人のものなのだ、その中から昔を探すというのが旅の目的であった筈である。我が俣を言つて旅人としてのルールを犯していた。恥ずかしいことです。

私は旅の中で土産を買うことにしている。社家町、門前町の楽しみである。

土産はその土地の文化であり歴史なのだ。そこに暮らす人と神仏の関係、私の筆力では手に負えないので触れないが、旅人の役割だと、土産を買うことを教えられたことがある。

今度の旅では自分自身のために大津絵の絵はがきを買った。

大津絵は江戸時代より逢坂の関所付近で売られていたという。仏画、風俗・風刺画で藤娘、鷹匠、長刀弁慶などがあがる。

「鬼の行水」が気に入った。虎皮の褌を脱いで湯桶に入る図は軀を洗って、心を洗わぬ者への風刺だという。心を洗うための一枚、大切な土産である。

本年九月に全国神社総代会の功労表彰を拝受しましたことは、日頃から神明奉仕につとめる氏子総代の皆様と一緒にいただいた栄誉と、厚く感謝申し上げます。

### やるベンチャーウィーク

六月、中学生の職場体験学習「高崎市やるベンチャーウィーク」が実施された。十四日に四名、十五日に四名、十六日に三名が神社を訪れ、それぞれ

### 年に二度の「大祓」

六月三十日午後六時、恒例の「夏越の大祓式」が行われた。大祓は、知らず知らずのうちに身に付いた罪穢れを、半年ごとに祓い清める、古来の神事。参拝者は境内の参道に設けられた大きな茅輪をくぐってお参りした。

十二月三十一日には午後三時から「年越の大祓式」がおこなわれ、毎年大勢の参拝者が訪れる。

が一日間の体験をした。



一人一人が六絃の和琴に触れ、奏法の基礎を体験した。

神饌田の御田植祭を間近に控え、スコップを手に田起こしの作業。(倉賀野中二年生)



### 中山道倉賀野宿

### 太鼓橋のこと

境内南側の一画に、大小二十数本の古い石柱が並べ寝かせてある。江戸時代、中山道倉賀野宿のちようど中ほど、五貫堀川に架かっていた太鼓橋の欄干の柱といわれる。これまで長く民家の庭に埋まっていたのだが、歴史を語る貴重な文化財であるとして、掘り起こされ、保存のため倉賀野神社に運ばれ、仮置きされているものだ。

「倉賀野宿の会」の『太鼓橋発掘調査報告』(平成二十四年五月)によれば、掘り出したなかに「寶藏橋」と刻まれた石柱があることから、太鼓橋の正式名称が寶藏橋と判明したという(以下、便宜上「太鼓橋」のままに呼称する)。

明治十四年、和堂土屋老平著『倉賀野誌』(注1)を見ると、太鼓橋は石橋で、所在は「本駅、中町下町界」。「長三間(約五・四m)、巾一丈(約三m)、字太鼓橋。前々板橋ニテ」とあり、もともとは木製の橋であった。宝永五年(一七〇八)と、享保十九年(一七三四)に架け替えの記録。天明三年(一七八三)には「浅間山焼、泥

『中山道分間延絵図』に見る倉賀野宿の太鼓橋。絵図の作成は文化年間頃だが、板橋として描かれている。橋のすぐ左に「字中町板橋」「仲町」とある。



入砂降」を被災、翌四年に架け替えられた。

「其後寛政八辰年(一七九六)十二月、御領主ヨリ御掛替、然ル処享和二年戌(一八〇二)十二月、宿内旅籠屋溜銭積金、式百両ヲ出金、石橋二掛替、翌亥年出来、字太鼓橋ト唱、石工江戸太右工門」とある。

板橋を架け替えてわずか六年後に石橋が新造されている。享和二年七月に諸国大洪水があったといわれるが、当地も被災したのだろうか。

また記述のなかで、「太鼓橋」のすぐ前に「字」の文字が置かれているのに気づく。これは「あざ」、「あざな」であって、「正式名称ではなく通り名」の意であろう。『中山道分間延絵図』では「字中町板橋」と書かれている。一方で不思議なことに、正式とされる

「寶藏橋」の名は管見にしてどの文献にも見当たらないのである。

ところで高崎藩町奉行の例規集『高崎町方私記』(注2)に「五十三、中町橋之事」とあるのは、太鼓橋のこととみて相違なく、

「中町板橋修復有之節ハ、町裏通り田子や(＝田子屋)之方江往來相廻し申候、尤道狭く御大名様方御通行者出来兼候間、御通無之時分ニ御修復有之候、右之通り往來裏道通候節ハ、道中御奉行江町裏江行程三町廻り道仕候旨、問屋共方注進いたし候(以下略)」とある。

まだ板橋だった頃の決まり事と思われるが、太鼓橋を修理する場合の迂回路、田子屋の方へ三百m余の「廻り道」とはどのような道だったろうか。また、大名が通行する橋である。町奉行だけでなく、幕府道中奉行管轄の重要な橋であった。

境内に置かれた石柱に目を戻すと、全部で二十七本。うち一本が「寶藏橋」。十四本は「三蔦屋権之丞」「高崎田町信樂藤兵衛」など、男の名。残り十二本に「三國屋内つね」「三蔦屋内とく」などであるのは、旅籠の女であろうか。

太鼓橋は、薄幸の飯盛り女等がけなげに献金してつくられたのだという説もある。しかし一方で、倉賀野の旅籠屋中が、いちばん賑わう表舞台に掲げた広告塔だったとはいえないか。大名も通る橋に、旦那衆と堂々と肩を並べてその名を刻んでいたのは、どのような女性だったのだろう。



左から順に「三國屋内つね」「寶藏橋」「柄澤屋内とら、みよ、とく、こう

太鼓橋がいつ架け替えられ、石柱が如何なる経緯を辿ったのか、不明なことが多々ある。散逸したものもあるかも知れない。

いま境内に静かに横たわっています。が、やがて相応しい場所に建ち起こされる日が待たれることです。(宮司記)

(注1)『高崎市史』第三卷所収(昭和四十三年三月 高崎市発行)。

(注2)『高崎史料集藩記録(大河内)』1所収(昭和六十三年三月 高崎市教育委員会発行)。

『高崎町方私記』の成立年は不詳であるが、文化十一年以後とされる。